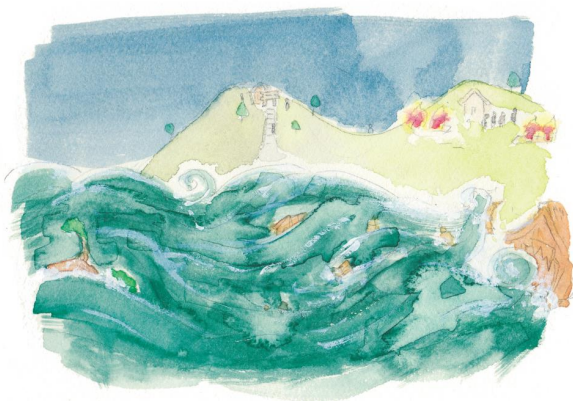


## 多読レベル 2

---

大切な「いなむら」(刈り取った稲)に  
火をつけた儀兵衛。  
何がおきたのでしょうか。



# 「稲むらの火」

いな

む

実話 1

もくてき ぼうさい かんが づなみ こわ し  
目的：防災を考える。津波の怖さを知る。

指導者の皆さんへ

📖 ジャボラNPO リライト本の目的

- ①多読による、学習者の自己学習の推進。
- ②外国人が理解しにくい日本人の心情や考え方、日本文化を学んでもらう。

📖 『多読表』を書く

これは、学習者の振り返り記録です。(ポトフオリオ)別紙

- ①何冊読んだのか(多読)記録します。
- ②おもしろさを三段階で評価します。(😊 😐 😞)
- ③感想のひとつと書きができます。

## 多読表

【○ぜんぶよんだ △ぜんぶよまなかった】

【😊おもしろかった 😐まあまあ 😞あまりおもしろくなかった】

レベル	Vol	タイトル	箇所 箇所	○△	感想	😊😊😊
ジャボラ	0	「いれて」				
	0	「あすれもの」				
	1	宝地蔵 <small>たからじぞう</small>				
	1	舌切力雄 <small>しなせきりきゆう</small>				
オリジナル	2	明日は遠足 <small>あしたは せんたく</small>				
	2	お母さんへんしん ～わたしは、時間を守るわよ！				
	2	桶むらの火 <small>おけむらの び</small>				
	2	正直五兵衛 <small>しんちきごべゑ</small>				



ものがたり  
せんはつびやくごじゆうよねん  
この物語は、一八五四年、紀ノ國  
きのくに  
ひろむら  
広村、今の和歌山県  
いま わかやまけん  
ひろかわむら  
広川村にあった  
ほんとう はなし  
本当の話である。

「いなむら」とは刈り取った稲のことである。

ぎへい いえ  
うみ やま  
儀兵衛の家は、海と山の間の少し

たか  
高いところにあった。

うみ い ほそ みち さき  
うみ い ほそ みち さき  
海へ行く細い道の先には、下の村があった。

した むら  
くさ ふる いえ じんじゃ  
した むら  
くさ ふる いえ じんじゃ  
下の村には、草ぶきの古い家と神社があった。



あき ひ ゆうがた ぎへい まつ  
秋の日の夕方、儀兵衛は祭りの用意をしながら、

た み  
田んぼを見ていた。

とし おお こめ  
その年は多くの米がとれたので、にぎやかな

まつ  
お祭りがあるのだ。

ぎへい やね うえ おお  
儀兵衛は、屋根の上にある大のぼりや

まつ ちようちん じんじゃ もり み  
祭りの提灯や、神社の森を見ていた。

わかもの じんじゃ ほう ある い  
はっぴの若者が神社の方へ歩いて行った。



しかし、家には儀兵衛と十歳の孫の忠だけだ。

儀兵衛は、少し気分が悪かったので、孫と家にいた。

その日は秋なのに、少し暑かった。

下の村を見ていると、地震がおきた。

その地震は大きくなかったが、儀兵衛は、

今まであった地震とちがうと思った。

地震が終わると儀兵衛は、下の村と海を見た。



うみ み ぎへい  
海を見て、儀兵衛はびっくりした。

うみ くら おお なみ うご  
海は暗くなり、大きい波が動いていた。

した むら ひと うみ み  
また、下の村の人たちも、海を見てびっくりした。

うみ み むら ひと うみ はし い  
海を見ていた村の人たちは海に走って行った。

み うみ そこ み  
いつもは見えない海の底が見えていた。

なみ たか すな ひろば うみ そこ  
波はどんどん高くなり、砂の広場のような海の底が

あらわ  
現れた。

みんなは、どうしてなのか分からなかった。



儀兵衛も海の底を見るのは初めてだった。

しかし、儀兵衛が子どもの頃、父が海のことを話していた。

儀兵衛は海がどうなるか分かった。

儀兵衛は、忠が下の村に行く時間と山のお寺に行く時間と

どちらのほうが時間がかかるか考えた。

儀兵衛は忠に言った。

「忠、忠。急いでたいまつに火をつけて持ってこい。」

たいまつは大雨の夜につかうために、どの家にもあった。



ただし  
忠は急いで持ってきた。

儀兵衛はそれを持つと、家の下の田んぼに行った。

そして、儀兵衛は

「いなむら」に火をつけた。

すぐに火は大きくなった。

忠はびっくりして、

「おじいさん どうした、どうした

おじいさん。」

と大きい声で聞いた。



でも、儀兵衛ぎへいはなにも言いわなかった。

儀兵衛ぎへいは四〇〇人の村むらの人のことばかり考かんえていたのだ。

忠ただしは泣なきながら、家いえの中なかに入はいった。

儀兵衛ぎへいがいつもと違ちがっていたので、

びっくりしたのだ。

儀兵衛ぎへいは自分じぶんの家の最後さいごのいなむらに火ひをつけた。

すぐに、山寺やまでらの鐘かねが鳴なった。鐘かねの音おとといなむらの煙けむりを見て、村むらの人ひとたちは海うみの近ちか

くから丘おかへ丘おかへと上のぼってきた。



夕方ゆうがたになっても、波なみはまだまだ遠とおくへいった。

少しすこすると、村むらの人ひとたちが火ひを消けしに來きた。

儀兵衛ぎへいは、言いった。

「火ひを消けしてはいけない。

みんなが、こここに來くるんだ。」

若い男わか おとこたちや

男おとこの子こが來きた。

元氣げんきな女おんなたちや

おんな こ  
女の子も来た。

たくさんのおじいさんや

おばあさんも来た。

むら ひと  
村の人たちは、どうして

ぎへい ひ  
儀兵衛が火をつけたのか、

わからなかった。

よる  
夜になると、

ただし な い  
忠は泣きながら言った。



「おじいさんが火をつけた。」

「どうして…」

儀兵衛は

「火をつけたのはおれだ。みんな来たか」

と言った。

村の人は言った。

「はい、みんないますが、どうしたんですか、

儀兵衛さん。」

「来た、見ろ、海を。」



遠くとおの海うみを見て、大きい声おおこえで叫さけんだ。

「来たき。俺おれはわかってたのだ」

みんな海うみを見た。

遠くとおの海うみが細ほそくて長い線ながせんだった。

それがどんどん太ふとくなった。

そして、大きくおおなり、高たかくなった。

「津波つなみだ」

と村むらの人ひとも叫さけんだ。

波なみが高たかくなり、大きくおおなり下したの村むらの近ちかくに来きた。





とても大きい音と一緒に来た。

波は家よりも高く、ゴォーと音を出して、

何度も来た。

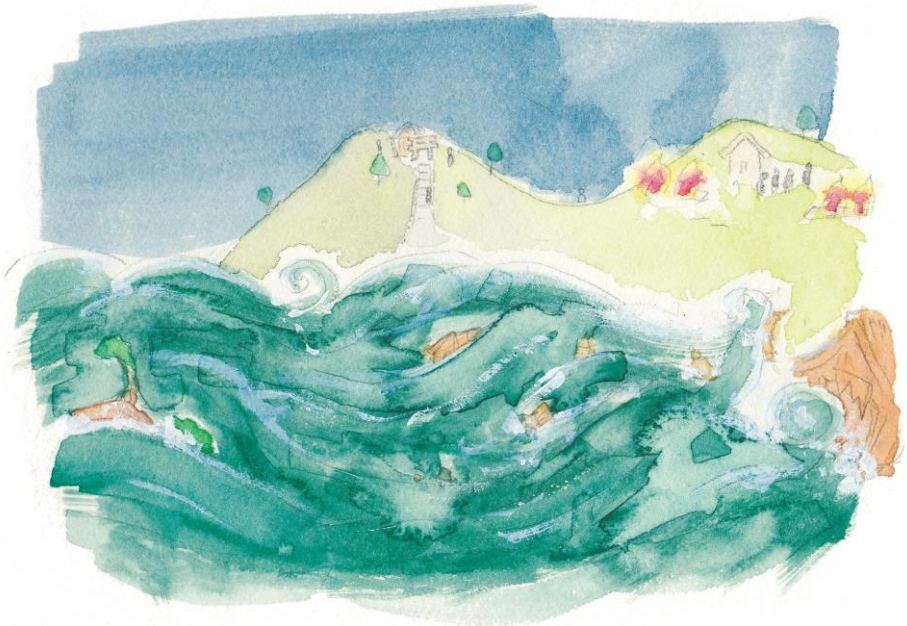
大きい波は、田畑の上に、そして、

神社の上に来た。

人々はその波を見て怖いと思った。

しかし、波は来ては帰り、来ては帰り、

だんだん小さくなっていった。





丘<sup>おか</sup>にいた村<sup>むら</sup>の人<sup>ひと</sup>は 声<sup>こえ</sup>がでなかつた。

村<sup>むら</sup>の人<sup>ひと</sup>は、黙<sup>だま</sup>ってじーっと下<sup>した</sup>を見て<sup>み</sup>いた。

「ない、ない、村<sup>むら</sup>もない、畑<sup>はたけ</sup>も田<sup>た</sup>んぼもない。」

あるのは、ごつごつした大<sup>おお</sup>きい岩<sup>いわ</sup>、すつと立<sup>た</sup>つ絶<sup>ぜ</sup>壁<sup>っぺき</sup>だけだ。

草<sup>くさ</sup>ぶきの家<sup>いえ</sup>は、遠<sup>とお</sup>くの海<sup>うみ</sup>の上<sup>うえ</sup>に見<sup>み</sup>える。人<sup>ひと</sup>々<sup>びと</sup>はとても怖<sup>こわ</sup>いと思<sup>おも</sup>った。全<sup>すべ</sup>ての物<sup>もの</sup>をな

くして、悲<sup>かな</sup>しくな<sup>な</sup>った。

「いなむらに火をつけたのは、津波が来ると思ったからだ。」

儀兵衛は言った。

「助かった、ああ、私たちは助かったのだ。」

みんな地面に座って泣いた。儀兵衛も泣いた。

そして、儀兵衛は言った。

「さあ、俺の家はみんなの家だ。お寺もある。」

みんな、しっかりしなければ。」

「そうだ、そうだ、しっかりしなければ。」

それから、あたらしい新しい村をつくった。

長い、長い時間がかかった。

しかし、すこ少しずつすこ新しい村はできた。

よんねん四年かかって、ていぼう堤防もできた。

それは、ぎへい儀兵衛の力があつたからだ。



あたらし　むらし  
新しい村ができたとき、みんなは言った。

「ありがとうございます。ありがとうございます、儀兵衛さんのいなむら火のおかげでみんな助かりました。儀兵衛さん、高いところに、いなむらの火が見えたからです。」

むらし　ひと　ぎ　へい　じんじゃ　た  
村の人たちは儀兵衛の神社を建てた。そして、

ぎ　へい　かみさま　ぎ　へい　だいみょうじん　い  
「儀兵衛さんは神様だ。儀兵衛大明神だ。」と言い、ずーっと忘れなかったのだ。

ご　なんど　おお　じしん  
その後、何度も大きい地震があった。

ぎ　へい　ていぼう　むらし　むらし　ひと　まも  
しかし、儀兵衛のつくった堤防は、村と村の人を守ったのである。



## 【レベルについて ～大人編～】

- ◆本書は、NPO多言語多読監修「にほんご多読ボックス」(大修館書店)のレベルに基づいて作成されています。
- ◆学習者がレベルに応じて、楽にたくさん読めるように、語彙や文法を制限してあります。
- ◆下の表が、「にほんご多読ボックス」のレベルの詳細です。

レベル	語彙	字数/1 話	主な文法項目
0 入門	350	～400	現在形、過去形、疑問詞、～たい など ※基本的に「です・ます体」を使っています。
1 初級前半	350	400 ～1500	現在形、過去形、疑問詞、～たい など ※基本的に「です・ます体」を使っています。
2 初級後半	500	1500 ～3000	辞書形、て形、ない形、た形、連体修飾、～と(条件)、～から(理由)、～なる、～のだ など
3 初中級	800	2500 ～6000	可能形、命令形、受身形、意向形、～とき、～たら・ば・なら、～そう(状態)、～よう(推量・比喩)、複合動詞 など
4 中級	1300	5000 ～15000	使役形、使役受身形、～そう(伝聞)、～らしい、～はず、～もの、～ようにする／なる、ことにする／なる など
5 中上級	2000	8000 ～25000	機能語・複合語・慣用表現・敬語など 例) ～につれて、～わけにはいかない、切り開く／召し上がる、伺う

◎NPO多言語多読については、ホームページをご覧ください。

<http://tadoku.org/> (「NPO多言語多読」でも検索できます。)

挿絵：黒瀬 多喜代

再話・監修：ジャボラ NPO

